

あなたは科学で何がしたいですか？ ：今日的学問論のダイナミクス

2015/07/08
科研費チャレンジセミナー@茨城大学

京都大学学際融合教育研究推進センター
宮野公樹

自己紹介

- 学際融合教育研究推進センター 准教授
 - 学内の異分野融合を推進することをミッションとする組織
 - 学際研究コンテスト
 - ワークショップ支援事業
 - 企業との包括協定、学者100名ワークショップ
- 学問論、大学論、政策哲学（かつて、金属組織学、ナノテク、医工学、教育工学）
- 総長補佐（松本前総長時代5年間）、文科省科学技術振興局学術調査官（4年間）
- 「研究を深める5つの問い」、ありがたくも目を通して頂いた方はどのくらい？

昨今の学術界

- これを考えると気分が悪くなる・・・（笑）
 - 人文社会系見直し議論
 - G型L型議論
 - 専門職大学院強化議論
 - 広島大学A-KPIの波紋
- いったい、文科省は何を守りたいのか？
 - もはや絶望しかない。なぜこうなったのか？の議論も本気で解決しようという覚悟を伴わないから、以前として宙をさまようだけ。
 - 「大学、どうあるべきか？」を考えると、そりゃあ経済価値に負ける。正しくは、「学問、どうあるべきか？」の問い。最初の最初で文科省はボタンを掛け違えている気がする・・・
- これを考えると気分が悪くなる・・・アゲイン（笑）
 - いったいつから「先取性」を争うようになったのか・・・（金がかからむからとか、論文生産のためにブルーオーシャンが都合いいからとか）これは科学という学問そのものの土台を壊していますよ。
 - 研究や大学制度の環境悪化で、興味関心の研究ができないというが、その興味関心は、研究に足るものなの？
 - 今、一番の問題は、研究者が知性を磨く場、まっとうなバトルフィールドが全然足りないこと
 - 科学（学問）精神は、もはや科学者のペルソナの一つとなり下がった。むしろ、今、人文社会系のほうがその割合が高いのでは？

昨今の「科学」

- いったい、「科学」はどこへ行ってしまったのか？
 - 中山茂「科学の分類」
 - 純粋科学： 緒言には純粋に真理探究を述べる領域
 - 技術科学： 緒言に社会的課題解決を述べる領域
 - 工学： 緒言には実装シナリオを述べそれに責任をもつ領域
 - なお、これらは大学でやる以上、「普遍」に通じてないと絶対にだめ
- | | サービス科学 | 産業化科学 | アカデミズム科学 |
|----|-------------------------|----------------------------------|------------------------|
| 構造 | 市民の利益に寄り添う科学 | バイオテクノロジーなど、産業と一体となった科学。資本の意志に従う | 〈科学の古典的規範〉を十分に保存している科学 |
| 評価 | 市民が自身の福利厚生にどの程度役立つのかを評価 | 組織内部の上司やスポンサーによる査定 | ピアレビューによる科学の論理に従った審査 |

でもね、僕は、何もかも「大学人、学者」が悪いと思うんです。

政治家も官僚もみーんな大学出身：笑 大学で何を学んだ？ 学問の普遍的な理念に触れた？ ほんのすこしでも真なる教養の精神に身も心も浸す時間を過ごしてれば、こんなことにならなかったのでは？ ソクラテスのいう対話をしてなかったのでは？ 学問とは知識のことではなく、知識に対する構えのことです。

大学においてそのような4年間を過ごせなかったのは、そして、学問精神の完成に生涯を捧げ、対話をもってしてそれを明確に後輩や学生に指し示す教授と出会えなかったのは、他ならぬ大学のせいです。

最後に：これからの「科学」

- 「科学（学問）」に何が出来るか？
 - 科学主義の社会的圧倒（評価、計測、証拠など、物質的合理性の第一義化）。そして、社会制度の内部まで組み込まれた科学・・・ 学者精神をもってしてそれに対抗するとしたら、武器として「科学」を選択することは妥当か？ 科学を持って科学を制す？
 - 現状をよくして後輩にバトンタッチする役目は、現科学者である我々の責任。政治や行政の責任でない。もうそのあたりの行政組織に扱える問題ではないのだ。
 - 自分事としての学術界： 科学者の人文化（思想性を宿す、緒言に嘘をつかない）
- 「科研費」の理解
 - 数ある科技行政の中で科研費は唯一といっていいほどの基盤的な制度。
 - もちろん、その審査方法など課題がないわけではないが、科研費は基盤であるが故に、科学（学問）を底からかえうる可能性の源泉とも言えるのではないか
 - 結論： 研究者の決意としての科研費申請、研究者の覚悟としての科研費申請。金取りのためのうその応用シナリオなど捨てて、読み手の学問精神を信じての学問をもって語るA4五枚の紙。その精神はきっとそれを読む審査員たちに響くことでしょう。